

【基本理念】

(1) 動物園の役割	ア 札幌市における円山動物園の役割 単なるレジャー施設ではない、公設動物園としての社会的役割を明確化する必要がある
	イ 国内、道内動物園における円山動物園の役割 他の動物園との差別化や連携を図る中で、円山動物園の位置づけや役割分担を提案していく必要がある。
	ウ 市民が求める動物園の機能 レクリエーション機能、自然環境教育機能、社会教育機能、種の保存機能などの整理が必要。
(2) コンセプト	ア 園内の展示コンセプト エリア毎のテーマや、展示方法の共通理念が徹底されていない。顧客にどのような体験を持ち帰らせるのかデザインされていない。
	イ 展示動物の方針・範囲 円山動物園にどのような動物がいるべきで、どう繁殖していくかの方針が定まっていない。
(3) 円山エリア全体	ア 円山エリアとしての一体的アピール 円山公園、原始林、北海道神宮、大倉山ジャンプ台、彫刻美術館などの近隣エリア全体として、一体的かつ効果的なアピールができていない。
	イ 円山エリアのまちづくり 円山地区、宮の森地区におけるまちづくりにおける円山動物園の存在が示されていない。
(4) 環境教育	ア 動物園として行うべき環境教育 現状では、展示やイベントの中で環境への取組みを呼びかける程度にとどまっており、総合的な取組みとしての位置づけができていない。
	イ 環境にやさしい施設のPR 太陽光発電などの環境に配慮した設備について、それ自体も環境教育のための教材として活用する方策が必要である。
	ウ 動物福祉・環境エンリッチメント 動物にとっての暮らしやすさ、本来の生息環境に近づける工夫が必要。
(5) 種の保存	ア 種の保存のPR 種の保存事業の重要性が十分にアピールできていない。
	イ 繁殖・野生復帰プログラム 円山動物園として取り組むべき希少動物等の繁殖、野生復帰等のプログラムが明確でない。
	ウ 研究活動の推進 動物学、生命学、野生復帰、種の保存に関する研究の充実が必要。
(6) 産学官・市民との連携	ア 企業との連携
	イ 大学等との連携
	ウ 関係機関との連携
	エ 市民・ボランティアとの連携
	オ 地域との連携
	カ 他動物園との連携

1 改善点（現獣舎）

- ・ コンクリートから土、緑へ（自然に近づける）
- ・ 獣舎が狭いため広げる工夫をして、動物に動きを出させる
- ・ 物理的あるいは精神的に距離感があるので改善する（施設改善、ふれあい等の拡充）
- ・ 来園者と動物の感動を共感できない
- ・ キーパー通路が狭く、足元も悪いため作業しにくい

2 改善点（ソフト等）

- ・ 展示のコンセプトがハッキリしていない
- ・ 飼育員らしい仕事、生きがいを感じられる仕事
- ・ 動物園の基本アイテム・・・動物、飼育技術、施設・設備、プログラム
- ・ 動物園の役割
 - レクリエーション、癒し
 - 環境教育・・・環境教育から人の行動を変える
 - 種の保存、命の教育、自然環境教育
 - ふれあい、体験、くつろぎ 等々・・・通貨型か滞留型
- ・ 大人（有料者）が楽しく時間を過ごせる
- ・ 動物科学館、動物センターを中心とする普及啓発の推進及び周知方法の検討
- ・ 他園とのネットワーク化、役割分担・連携
- ・ 産学官連携の拡充

3 動物園側が求める動物園（案）

- （1）コンセプト、役割、使命等が明確化した動物園として、園内のゾーニング化を図る
寒帯、温帯、熱帯、北海道等の地域別を基本としたゾーニング。さらには目的別に野生復帰ゾーンなどを設定し、展示動物の集約化を行う
- （2）円山川を活用した「野生復帰」ゾーンを新設し、北海道ゾーンとの整合性を図る
当面の野生復帰プログラムとしては、
昆虫等：オオムラサキ、オニヤンマ、ニホンザリガニ、
猛禽類：シマフクロウ、オオワシ
を対象とする
- （3）子ども動物園を中心とするふれあいを推進し、「みんなのドキドキ体験」の拡充を図り、来園者の満足度を高める

4 動物等の「選択と集中」

- （1）コンセプトにもとづく動物等の「選択と集中」を実施する
- （2）限られた敷地の中で各動物ごとに広い飼育環境に改善するとなれば、
園路を狭くしたり、減少させる
動物の「選択と集中」を行う
獣舎の重層化を図る
など、複合的に実施しなければ解決できない。特に獣舎の重層化は財源問題が前提となることから、 と の組み合わせを優先することになる
- （3）「選択と集中」を実施した場合、余剰動物はブリーディングローンなどで受け入れ先を探さなければならない。また、高齢、繁殖等の理由で受け入れ先がない場合の対応も考えなければならない。

【選択と集中の考え方】

選択と集中する場合、対象となるものは展示動物、普及啓発機能とおもわれる。

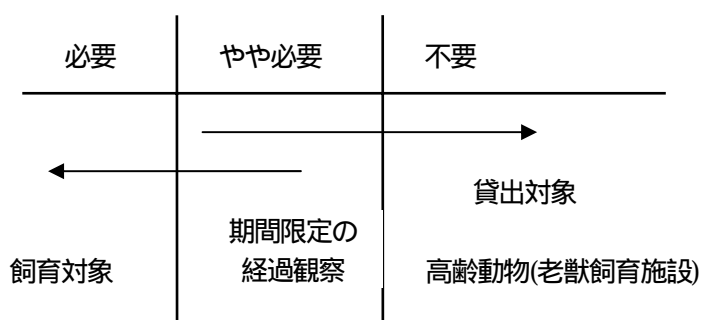
<展示動物等>

- (1) 動物
- (2) 鳥類
- (3) 昆虫・・・昆虫館
- (4) 植物・・・熱帯植物館、ミカン温室、ユーカリ温室

展示動物等の選択と集中する場合、一定の判断基準（ものさし）が必要になる

<動物類のものさし>

- (1) 国内外の状況（当該動物の市場性、入手の困難性・・・）
- (2) 野生の状況
- (3) 北海道産動物（地元）の可否
- (4) 当該動物の余命（寿命）・・・老獣飼育施設も視野に
- (5) 円山の過去の飼育実績
- (6) 繁殖技術
- (7) ストック計画
- (8) 環境教育教材としての要否
- (9) ふれあい、体験等の適否



<動物科学館と動物センター>

科学館：展示、普及啓発

動物園センター：総合案内、情報センター、会議室、事務室

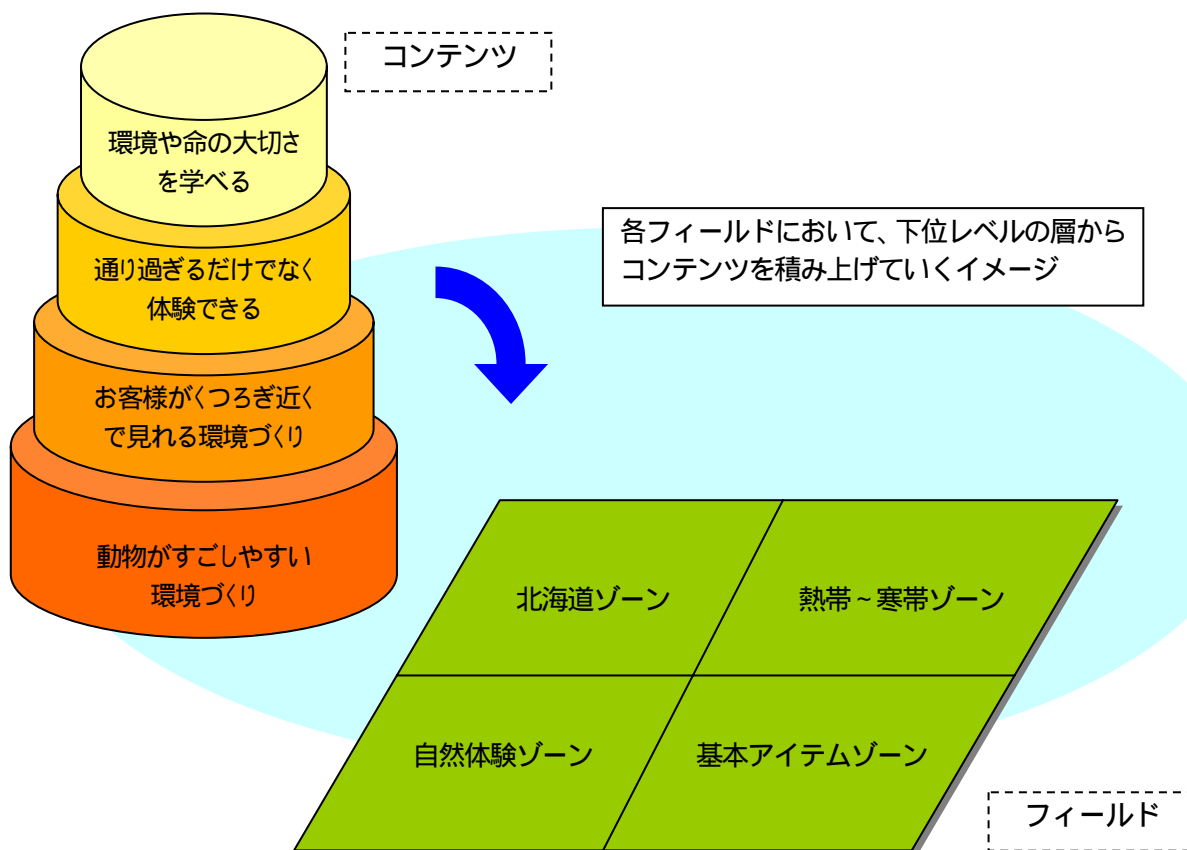
科学館の主な機能は、動物園からの委託契約に基づく展示と普及啓発であり、ビジョン全体のコンセプトに基づいて機能・役割を見直すこととなる。

また、動物園センターは、正門脇にあり来園者に対する総合案内と情報提供のためのセンター機能を有している。動物園には正門と西門があり、遠足などの特定団体の入場は正門が多いものの一般来園者は西門からの入場が多い状況にある。また、動物園センターは動物園の北端にあり来園者が入場の際に総合案内を訪れない限り、一般来園者から見ると遠い位置にあり、的確な案内業務サービスとは言い切れない。このため、総合案内と情報の機能は新たに設置するか、動物園の中心部に近い位置に移設することが望ましい。

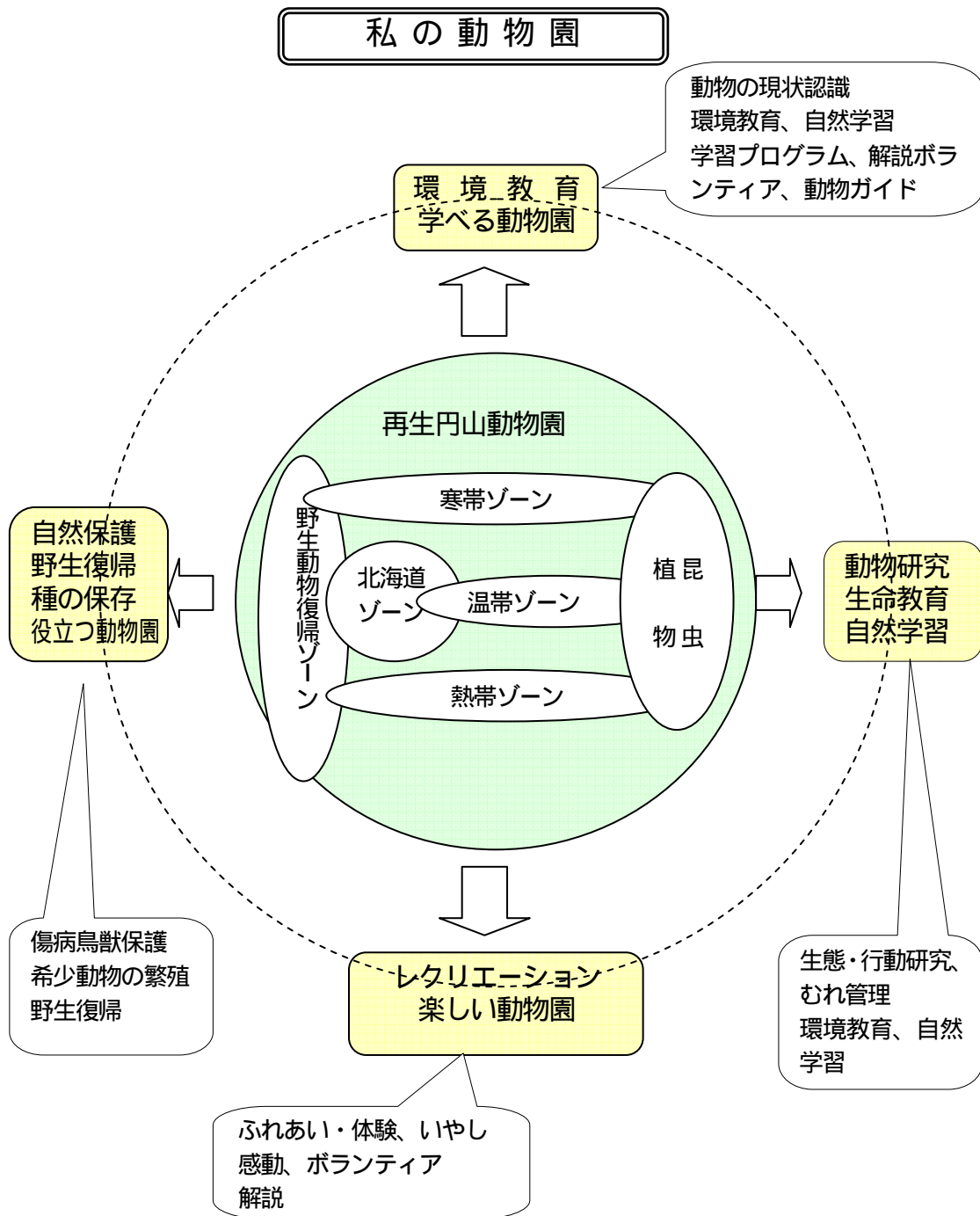
基本理念	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「これからの動物園」はソフト面をしっかりと捉えて実施する ・ 市民に自慢してもらえらる動物園 ・ 自然学習、環境教育など教育の場と位置づける ・ 円山流で回りに流されないようにする。独自の展示の検討 ・ ・ 動物の選択と集中（コレクション性）が必要 ・ ・ 道内の園との役割分担・交流を行う ・ 市民、産学官と連携し、種の保存、環境教育に取り組む
意識改革	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体質が古い（新人に働かせ古い職員は遊んでいる。古い職員が仕切っている） ・ 職員に何が出来るのか、無駄が多い（意識改革が必要） ・ 担当動物と自分の世界の中で生きようとしていて、園全体には気が回っていない ・ 全体の指揮命令系統が明確でない マネジメント ・ 職員の意識に温度差がある 意識改革が必要 ・ 動物舎ごとに常に話し合いを継続し、レベルアップを図る ・ ・ 園内関係者の意識改革を実施し、来園者サービスの向上を図る
展示	<ul style="list-style-type: none"> ・ 動物園の入り口に顔を作り、ワクワク感をだす トンネル、アニマルブロンズ（原点3種）ハクセイ・・・等々 ・ 科学館（＝イベントホール）保有財産の見直しと有効活用・・・来園者が見やすい環境を創出 ・ ・ 動物の生態による飼育展示方法の導入 ・ 距離感を感じさせない展示方法の検討 ・ 地域別ゾーン展示へ移行し、合わせて北海道ゾーンを新設する ・ 繁殖を目的とする飼育展示 ・ 動物の福祉の研究、充実エサ箱や休憩場所など動物の修正を活かした工夫 ・ 集客が多いところをまねる（リピーター確保） ・ 親子展示することが集客になる。動物の子どもは集客効果があるので単身のところは相手を補充 ・ 教育スペース、疑似体験コーナー等スペシャルシートを確保 ・ 清潔な雰囲気は、自然と人が集い環境と動物たちの生に対する学びの場を提供できる 解説、えさやり体験、手書きの看板 ・ 動物舎の作り方を考える ・ 高齢動物を大事にしながら世代交代を見極める動物園（老獣飼育施設） ・ 園内全体が無機質で、動物の色や大きさ、個性を感じる色使いで展示 ・ ふれあいを強化する。リスザルの利用 ・ タスマニア館との展示動物園の入れ替え ・ ・ 昔はたくさんの昆虫等が生息していた（サンショウウオ、カエル、ニホンザリガニ、オニヤンマ・・・）これを繁殖して、自然界に戻す ・ エゾリスの餌付け

集客	<ul style="list-style-type: none"> ・ マスコミの活用を推進 ・ 出前講座の積極的实施 ・ 市民の多くは冬期休園を思っているので、もっとPRする ・ 冬季のまつり(イベント) ・ 毎週(雨、冬対策に使える) ・ 各種イベントの実施・拡充(みんなのドキドキ体験)
ボランティア	<ul style="list-style-type: none"> ・ ボランティアの位置づけが明確でない ・ ボランティアと職員の交流・ふれあいが無い ・ ボランティアとの連携
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人員が少なく来園者と話す時間が少ない、本来のサービス業の業務が出来ていない ・ ふれあい等のイベントを実施することで、忙しいために安全がおろそかにならないようにしたい。安全性の確保が大原則である(グループ化で対応できないか?) ・ キーパー通路が狭く、足元も悪いため作業しにくい ・ 海獣舎横の旧カワウソ・ビーバー舎の跡を花壇に変更 ・ 開園時間を遅らせることで、清掃後の獣舎等を見せられる 年間の開園総量を決めて開業時間にメリハリをつける ・ 飼育動物に給餌する量(質、カロリー)が多く、肥満動物が多い

展示の基本コンセプト



<動物園の基本イメージ>



【獣舎関係】

ワシ 猛禽	ワシ・猛禽類	<ul style="list-style-type: none"> 繁殖しても引き取り先がない 引き取り先を探していない。過去にオオワシを国外に数羽寄贈している野生に復帰させれる 収容施設の老朽化と狭隘化 リフォームが必要だが、オリだけでいいのではないか 野生復帰させるのであれば、展示用とトレーニング用のオリが必要 繁殖用（年間予定繁殖数・・・等）の検討が必要・・・ストック計画 *略図参照1
子ども動物園	子ども動物園	<ul style="list-style-type: none"> ニワトリはふれあいにはならない、ウサギのようなタイプを充実したほうがふれあいになじむのではないか。ニワトリ系の扱いを検討 同一種による感染症の危険性はあるが、ふれあいに使えるウサギ系でもよい 小動物館の野鳥の扱い 保護した野鳥ではあるが放鳥できるものは放鳥し、放鳥できないものは沢側（ふれあいの森？）に移したい。そしてやめたい ふれあい系の充実・強化 より充実したい リスザルイベント参加券の配布・受付方法の検討 充実にはボランティアの参画が必要 来園者の期待度は高く、メニューと実施方法でメリハリを付けているが、よりメリハリをつける必要がる 命の鼓動を再確認できる 夜行性動物園の充実・集約 子ども動物園＝ふれあい、体験のイメージがあるので原点に回帰した取り組み アニマルセラピーの役割も果たせる 子ども動物園の狭隘とタスマニア館の活性化を図るため、タスマニア館に一部を移動し有効活用を図る 暖房の要否で動物を集約できる *略図参照2
	ビーバー	<ul style="list-style-type: none"> 巣の中を見れるようにする（現獣舎で対応可能） 繁殖の問題
	ヨーロッパカワウソ	<ul style="list-style-type: none"> 1点飼いはやめ、繁殖を目的とする 繁殖で増えた動物の扱いを考える必要がある
	プレーリードック	<ul style="list-style-type: none"> 放飼場の増設 近親相姦になる可能性がある
	ミーアキャット	<ul style="list-style-type: none"> 落ち着いて繁殖できる環境にない
	野鳥	<ul style="list-style-type: none"> 必要性の検討 保護した野鳥ではあるが放鳥できるものは放鳥し、放鳥できないものは沢側（ふれあいの森？）に移したい。そしてやめたい

熱帯動物館	ゾウ	<ul style="list-style-type: none"> 新ゾウ舎の建設構想を検討すべき 現時点で改築しても花子がなじめるかどうか難しいので、花子の死後、市民を巻き込んで改築を目指す。または、新ゾウの入手を目指して新築計画を準備する 高齢化しているため、その対策（老獣飼育施設） シャワー装置または日陰が必要 熱帯動物館の屋上から見学できないか？（ピュースポット？） 要検討（施設の安全強度面）
	マレーバク	<ul style="list-style-type: none"> 相性が悪く繁殖に至らない 人工繁殖、BLの検討
	シマウマ	<ul style="list-style-type: none"> すぐ驚く馬がいる 放飼場にあるあずまや（納屋風の丸太小屋）はほとんど利用していないので不要
	ダチョウ	<ul style="list-style-type: none"> 玉子にインパクトがあるので、工夫次第ではスターになる可能性があるため上手にプロデュースする必要がある 高齢なので、の死後にヒナを購入し繁殖、採卵する
	キリン	<ul style="list-style-type: none"> 屋内外の給餌方法を変えて来園者から見やすくする 移動可能な採食場所の検討 日陰用の傘必要 <p>* 略図参照 3</p>
	カバ	<ul style="list-style-type: none"> 日本一の広さを誇る獣舎を希望 プールの給水を単に水道管から給水しないで、人工の滝のようにする プールを人の目の高さにして、水中行動を観察できるようにする
	草食獣舎	<ul style="list-style-type: none"> 臭いと、設置目的に合致しないハクセイの解消 利用されていない2階部分の撤去 各獣舎の独立 晴天・冬対策として、獣舎の人止め柵外側に屋根または庇を設置 エサ箱の設置場所を工夫して、来園者に顔を向けるようにする ミニサファリ方式で、植栽、同居（視覚的含む） <p>* 略図参照 4</p>
	ユキヒョウ	<ul style="list-style-type: none"> 種別調整者であることをしっかりアピールすべき
	トラ・ライオン	<ul style="list-style-type: none"> ガラス化で人気度がアップしている 外側の見せ方として、距離感があるので一部改修で対応できる <p>* 略図参照 5</p> <ul style="list-style-type: none"> ライオン の死後、新しいアフリカライオンを入手する（国内で入手可）。または種の保存を考えてインドライオンの入手を検討する
	猛獣舎	<ul style="list-style-type: none"> 獣舎が狭い、サファリ形式が望ましい 園全体面積の限りがある 高齢動物を最後まで寿命を全うするように飼育する 展示方法としては客より動物を第一に考える 1点飼いはやめ、繁殖を目的とする 繁殖で増えた動物の扱い 新たにヤマアラシの導入を検討してはどうか

サル山	ニホンサル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 樹木の整備 ・ 自然林を取り込んだ採食場所の確保(クヌ木の植生地に採食場を確保して移動させる) 林にいるサルの姿を見せられる クヌギを利用することでメイン通路を遮断することになるので、北側に作ってはどうか ・ 来園者を入舎させる(感染症の可能性あり?) ・ サル山と来園者に距離感があるのであれば双眼鏡を貸し出しては? ・ サル山躯体内の鉄筋が見えているので、崩壊する恐れがある <p>*略図参照 6</p>
モンキーハウス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全体的に頭数に対し飼育面積が狭い(種類の減少又は頭数の削減) 9種から4種に減少可能 展示方法としてストーリー性をもたせ多面的展示とする。原猿類(2種) 真猿類(2種) 類人猿 *略図参照 7 ・ 室内ガラス、檻などのメンテナンス ・ 人も動物も動きながら見られる ・ 例: 熱帯動物館、室内をジャングルのように装飾し、ジャングルの中から動物を見るような工夫及び多面性を持たせた展示 	
チンパンジー館	<ul style="list-style-type: none"> ・ タワーにのぼったチンパンジーは来園者から見にくい。チンパンジーの行動を見せるように工夫 ・ 高齢チンパンジーの対策(老獣飼育施設) 	
シカ・トナカイ舎	<ul style="list-style-type: none"> ・ 室内に収容でき、飼育管理しやすい場所に移したい 屋内九時が出来るようにしたい。また、園路側に餌場を移動したい ・ 繁殖をさせたい トナカイは高齢で繁殖できないが、若い1個体を導入して10頭までの繁殖を目指す シカはこのままでは自然消滅するので、若いことあを導入して動物園の原点でもあり魅力的な展示方法を考えたい。 ・ トナカイでソリを引かせたい。冬の動物園に欠かせない存在 ・ 現在地は飼育に不適 ・ フェンスの補修が急務である ・ (仮)北海道ゾーン内で、放飼場の確保を検討する ・ 傾斜になっていて下が見えないので、空中通路を設置する 	
オオカミ舎	<ul style="list-style-type: none"> ・ 繁殖をさせたい 繁殖にしっかり取り組んでいるところはない ・ 現在のシカ舎を改修してオオカミを群れで飼育したい 当面フェンスの補修。改築する場合は広くしてアップダウン付の獣舎化を図りたい ・ エゾオオカミは絶滅してすでにいないので、シンリンオオカミより大型の大陸オオカミの導入を検討してはどうか? 	

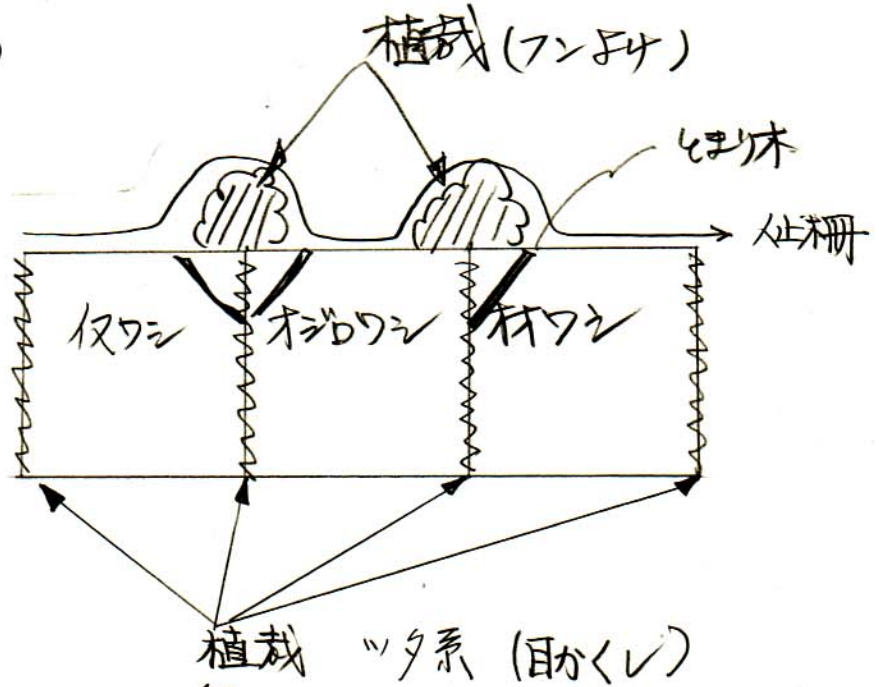
	ラクダ舎 (ラクダ) (ラマ)	<ul style="list-style-type: none"> ・ ラクダ を帯広から借りて繁殖させる園にとって、繁殖の必要性はあるのか？ 絵本や物語でなじみのある動物だ より大きい を導入することで、比較展示が出来効果ある ・ エサ箱の位置によって見せ方が変わる ・ 空マス対策で導入したため、特にコンセプトはない ・ 不人気で引き取り手がない。したがって死亡不補充
世界のクマ館	ホッキョク	<ul style="list-style-type: none"> ・ 繁殖を継続するのであれば新獣舎が必要 ・ 独立舎する考えはあるが、繁殖を考えると現状が良いのではないかと将来的にはセンター化を目指してもいい。または、現獣舎を繁殖用にして展示は新築の考えもある ・ 隣マスとの開放・連結で親子交流は可能でないか ・ 子を残すなど将来の繁殖を考える必要あり ・ 現ペアであと5回程度の繁殖は可能と思うので、その間に将来の繁殖を考える ・ 海外との交流を検討する時期に来ている ・ プールをガラス張りにして泳ぐ姿を見せる ・ 現在の見学者対応として階段状の観覧台が必要 <p>* 略図参照 8</p>
	ナマケ	<ul style="list-style-type: none"> ・ もしナマケグマが残るのであれば、アリを食う生態を展示したい
	共通	<ul style="list-style-type: none"> ・ クマは円山動物園の特徴、シンボルなのか？、種類が多すぎないか。若いときはどんどん動き回る。 ・ 獣舎の居住環境を良くして種類を減らせるのではないかと。現獣舎でも数種は飼育可能と思う ・ 共有スペースを設けることで居住環境を向上できる、そのため種類を減らすことも必要 ・ 世界のクマ館としては未完成であるから、名称を変更してはどうか ・ 北海道ゾーン、地域別分類が必要である ・ 環境エンリッチメントを実施したい ・ コンクリートの放飼場を土、緑化したい ・ 生垣（植栽）の高さを低くして、見やすいようにしたい ・ 距離感がある ・ 配色が悪い、もう少し検討のしようがある
海獣舎 (血統登録 トド小樽、ゼニガタ釧路)		<ul style="list-style-type: none"> ・ 海獣舎は距離感が近く、来園者に喜ばれている ・ 単独飼育から家族飼育に出来ないか、トド を導入することで比較展示可能 ・ エサを売り現金を回収し飼料代の節減が図れないか 野生動物にエサをやることで問題が発生しないか。人間と動物の関係を整理する必要アリ ・ 水質悪化に伴い飼育環境が悪い 循環装置を導入できないか ・ ゼニガタアザラシは淡水対応しやすい ・ 小樽市水族館（血統登録：トド小樽）と役割分担できないか 海獣は小樽市に集約して小樽を本家と円山を分家の位置づけにする。または、フリーディングで借りれないのか。

熱帯鳥類館	<ul style="list-style-type: none"> ・ 鳥の補充と木々の入れ替え必要（インコ、スズメを排除し樹の入れ替えを実施し昔の熱帯鳥類館に復元する。また、熱帯鳥類が死に魅力がなくなっている） ・ 鳥の繁殖を推進したい ・ 熱帯鳥類館の外側にイメージに合わない鳥類がいる。水鳥、白鳥、インコなど鳥を総合的に調整する必要アリ ・ 施設が古い <ul style="list-style-type: none"> 天井のガラス清掃が必要 ・ 別な使い方を考えたほうがいい。あるいは熱帯植物館と合体しては熱帯植物館には繁殖に使える植物がない
爬虫類館	<ul style="list-style-type: none"> ・ 熱帯植物館を廃止した場合、現在位置での独立化は難しいのでは。移転も考える必要アリ ・ 暖房アリ（熱帯） ナシ（温帯）に分類して飼育展示できる。温帯は冬季冬眠させることで、他に例のない展示となる。 <ul style="list-style-type: none"> その場合、暖房システムを2系統にする ・ 北海道産（温帯）を中心とした飼育 ・ 熱帯は虫類と熱帯鳥類は混合飼育可能 ・ 国際希少種、飼育困難種の繁殖に成功して国内ではリーダー的存在 ・ ホウシャガメの繁殖に取り組む ・ 展示マスの整理
昆虫館	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昆虫は子どもたちにも人気があり特別展もやりやすいが、色々なところが実施していて、なかなか主役になれない。 ・ 施設が古い <ul style="list-style-type: none"> 増築も難しいし、バリアフリー化を図った場合現施設の廃止あるいは移転も考えなければならない 温室の費用対効果を踏まえ存廃を検討する必要アリ。または、転用を検討する ・ オオムラサキプログラムやピオトープなどを活用して地元産の昆虫に転換できないか
熱帯植物館	<ul style="list-style-type: none"> ・ 常夏のイメージにあこがれて設置したので、時代にマッチしないのではないか。熱帯鳥類館との合体できないか。あるいは廃止もやむをえない ・ 施設が古く維持管理に多額な費用を要する。また、樹木の選定を急いで実施しなければならない ・ 横の温室に栽培されているランは、ウイルス汚染していて処分しなければならない
フリーフライト	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4種類に増え4人体制でフリーフライトを実施する ・ 猛禽類のリハビリと野生復帰に取り組みたい

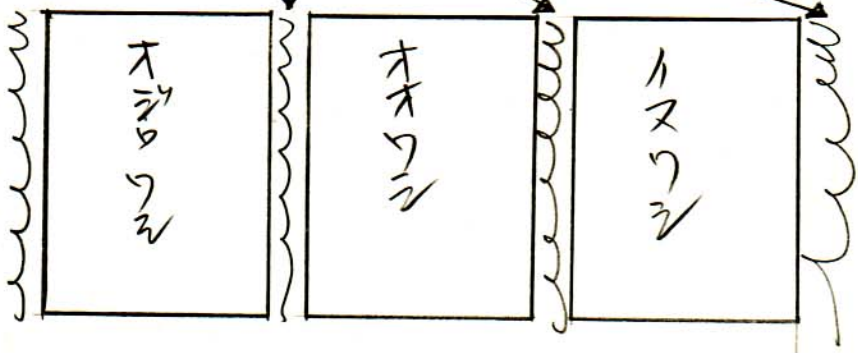
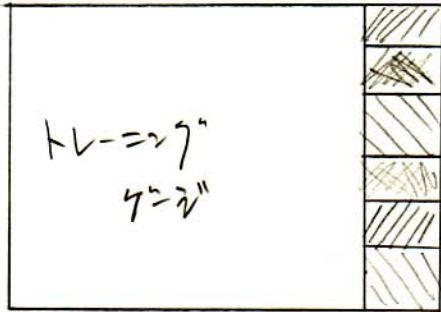
総合 水鳥 舎	タンチョウ マナヅル	<ul style="list-style-type: none"> 施設が狭い(求愛ダンスも出来ない) 自然・生息環境に近づける(草、牧草・・・) マナヅル、ハワイガンは、種別調整者に任せていいと思う タンチョウは、隣接するトキの獣舎まで拡張しても狭いので、釧路動物園と連携できる仕組みを考えたほうがいい
	ショウジョウトキ クロトキ	<ul style="list-style-type: none"> コロニーを作り生活するタイプ 耐寒性があるので冬も活用できる環境(屋内外との往来) 現状では繁殖は困難。居住スペースも不足している
	ペンギン	<ul style="list-style-type: none"> 産室内のフンが取れやすいように床面の塗装 天井部のネットを恒久的なものに 巣穴の中を見せるようにしたい 新しい血を入れ世代交代を考えなければならない プールを改良して見せ方を本格的に検討しなければならない
	ペリカン	<ul style="list-style-type: none"> 耐寒性はあるが夜間は室内に入れなければ、足が凍傷になる スポンサー性も考えられる
	共通	<ul style="list-style-type: none"> 設置目的としては魚食の鳥を一堂に集約した。しかし、種類が多すぎ所期の設置目的とはズレている 水鳥、白鳥池、インコ、熱帯鳥類館(外側)野鳥等、全体を調整する必要あり
類人 猿館	オランウータン ゴリラ	<ul style="list-style-type: none"> オランウータンのプール排水管が壊れていて、地中に水が浸透している コンクリート床を土、植栽にする(敷きワラ、チップ、抜いてもいい植栽) オランウータンの施設改善は、ゴンの対応次第で可否判断する 縦長の施設で上部空間を活用(ロープ・檻で上下、)施設の改善をすとなれば、ゴリラの対応次第になる プライバシーに配慮した隠れ場所 冬も活用できる環境(屋内外との往来) ゴンとゴリラが帰ってきててもスペースの確保は可能 ゴンの余命はここ数年である 死後の新規導入は、全国的な繁殖計画があるので子どもを簡単に入手することはほぼ不可能 ゴンがいつまでも帰札しないとなれば、市民に向けた説明責任がある キーパー作業中も監視できる <p>*略図参照9</p>
	テナガザル	<ul style="list-style-type: none"> 屋内飼育場が来園者から見えない コンクリート床を土、植栽にする(敷きワラ、チップ、抜いてもいい植栽) 雑種2頭、高齢1頭
白鳥池		<ul style="list-style-type: none"> 水鳥、白鳥池、インコ、熱帯鳥類館(外側)野鳥等、全体を調整する必要あり
タスマニア館		<ul style="list-style-type: none"> 名称の変更 放飼場の変更(案あり) 近未来的には散歩コーナーを設ける・・・共有化・多目化の検討が必要 夜行性動物の扱いを考える必要アリ(オオコウモリも夜行性?) 現空マスの活用方法を検討する ふれあいとして、子ども動物園の拡張も考える <p>*略図参照10</p>

(別添参照1:ワシ・猛禽類)

現状

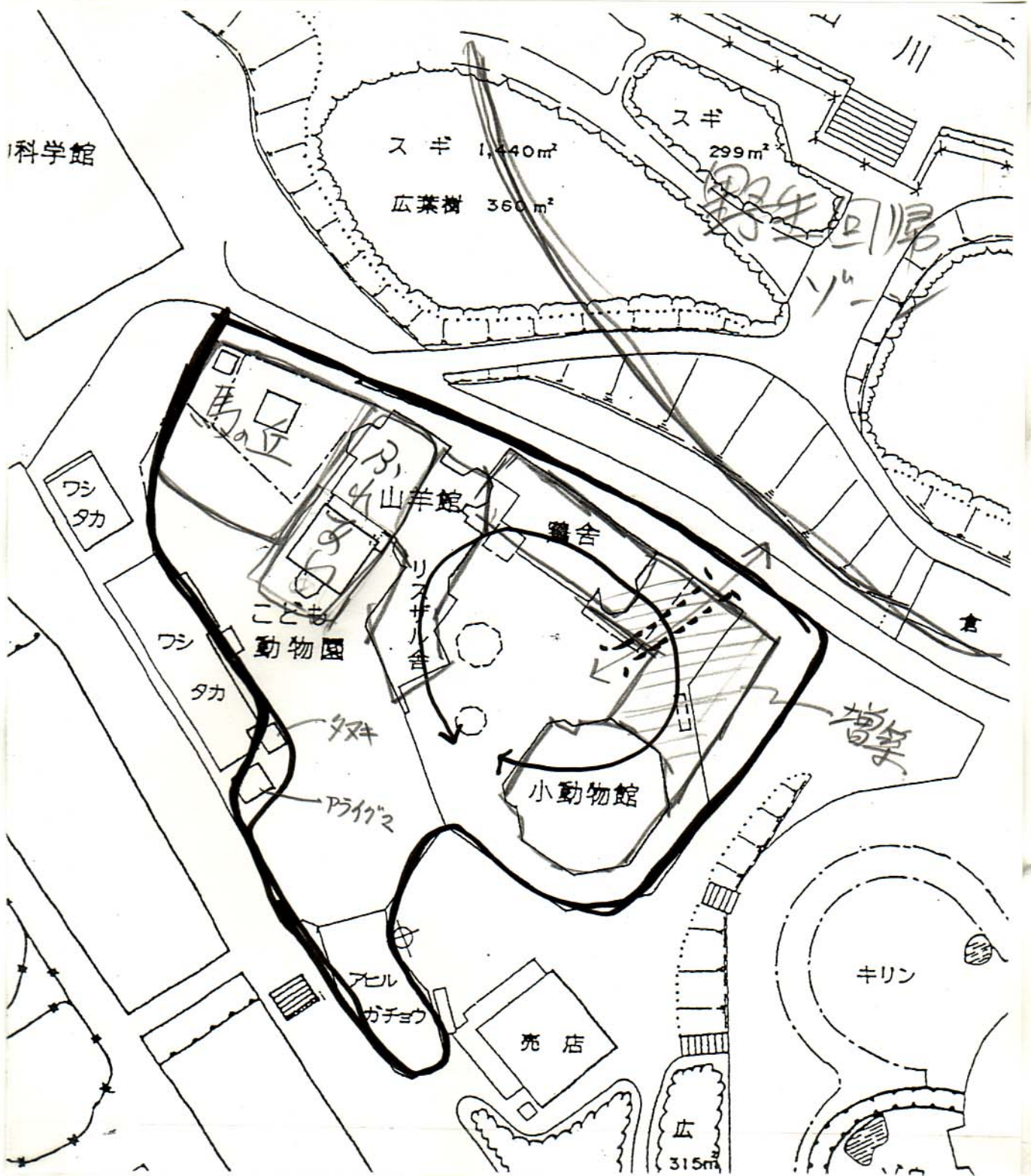


沢利用の場合



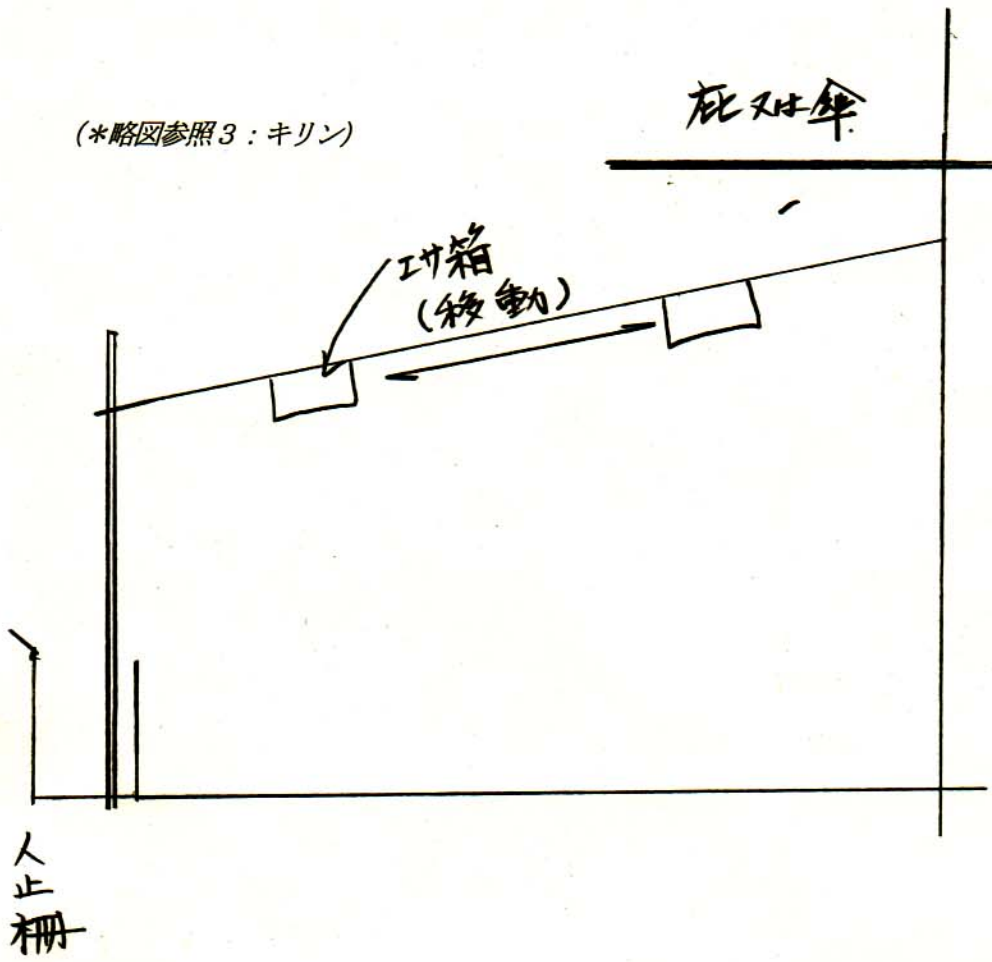
図②

(*略図参照2:子ども動物園)



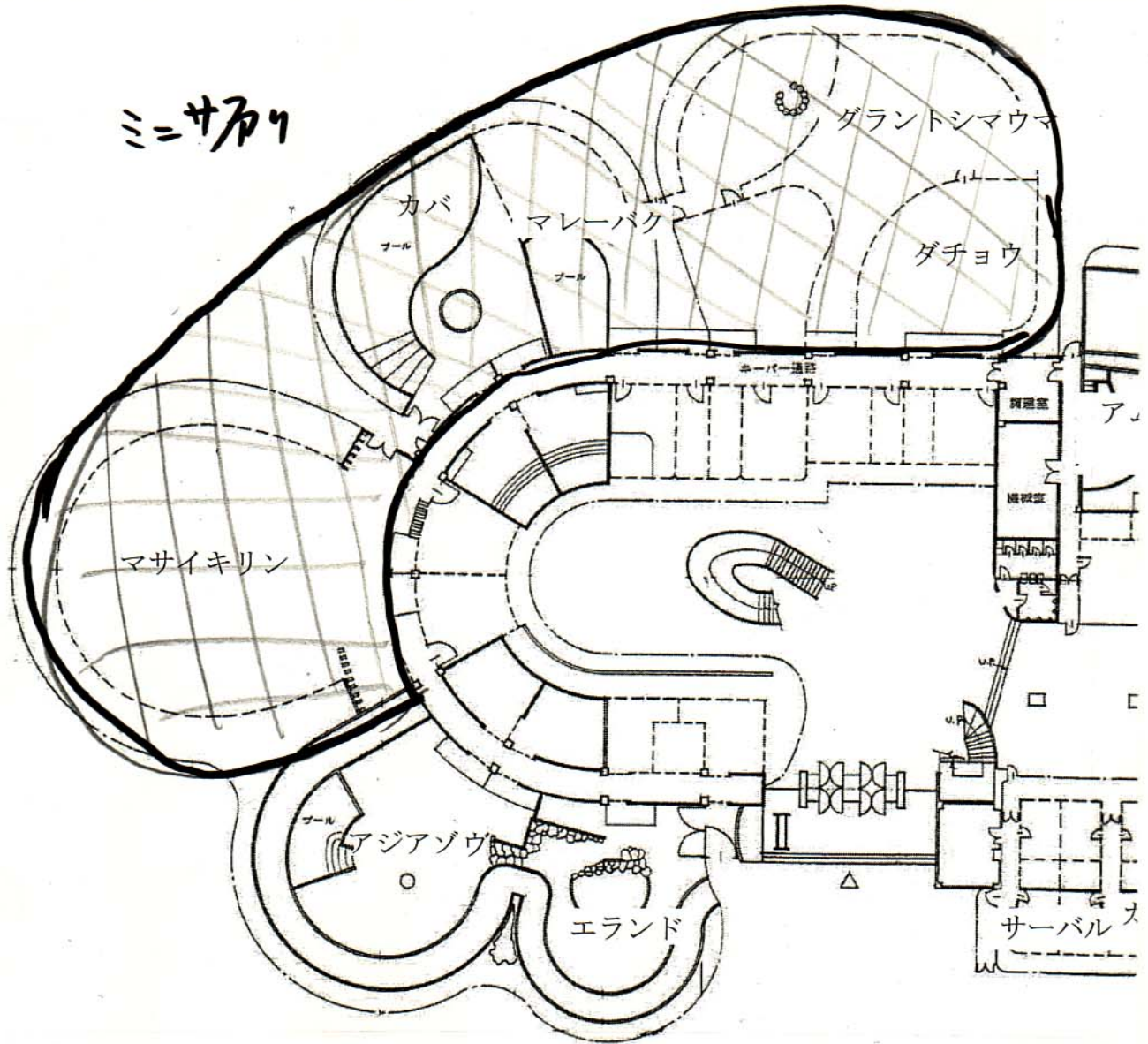
略図 3

(*略図参照3:キリン)

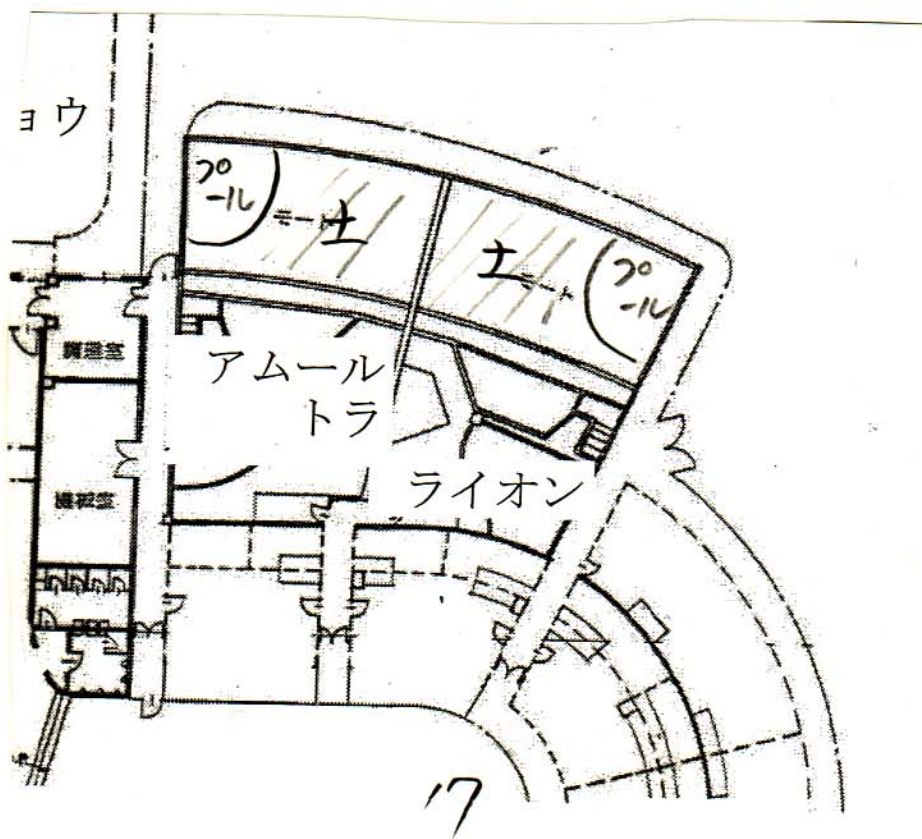
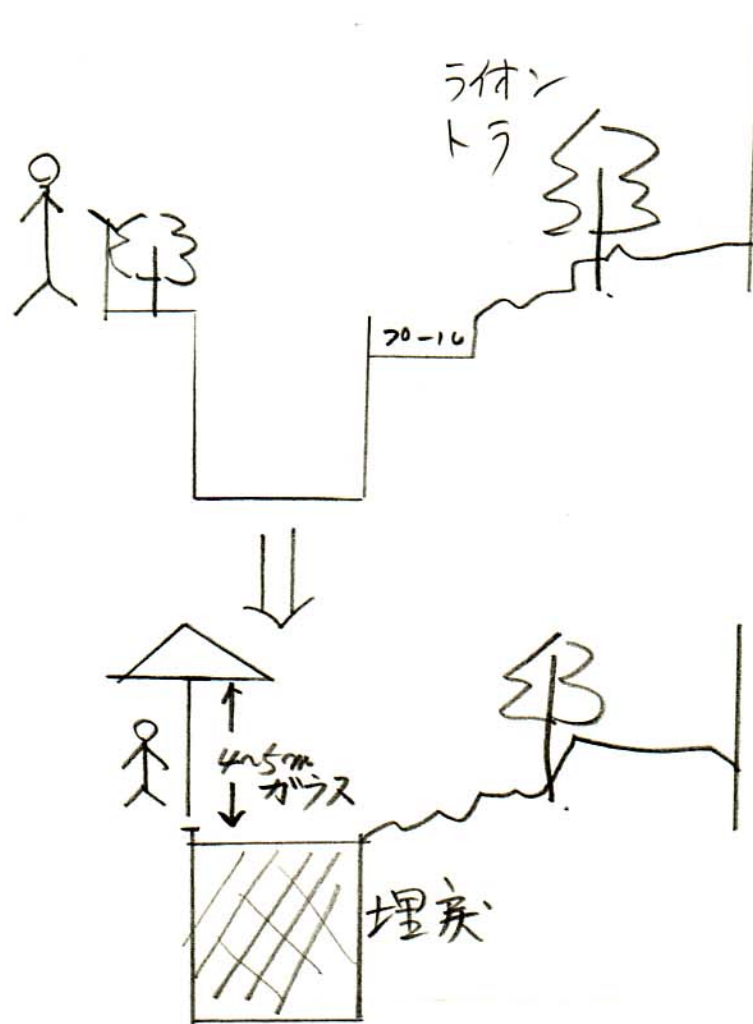


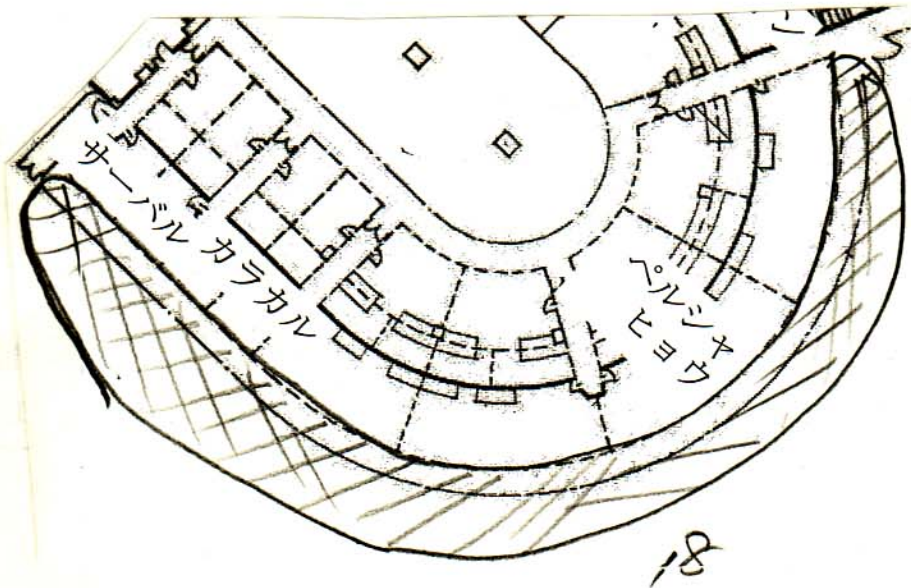
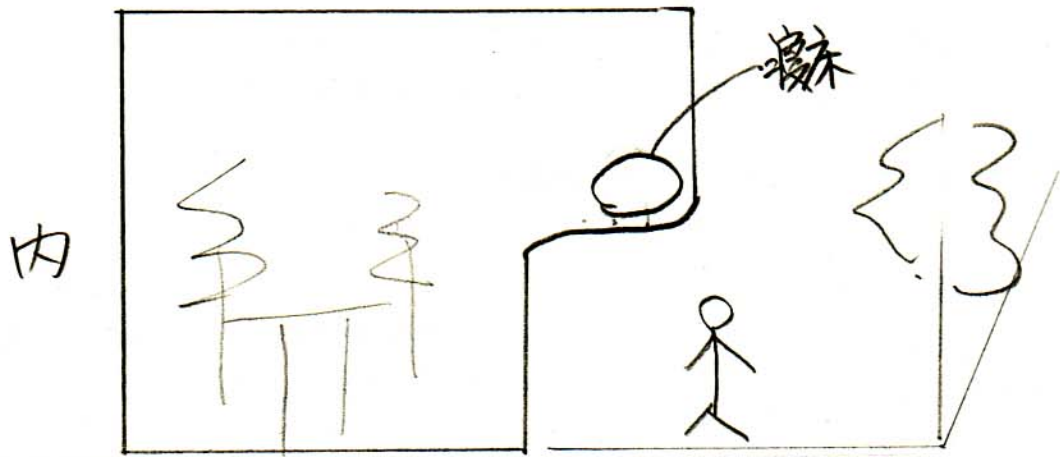
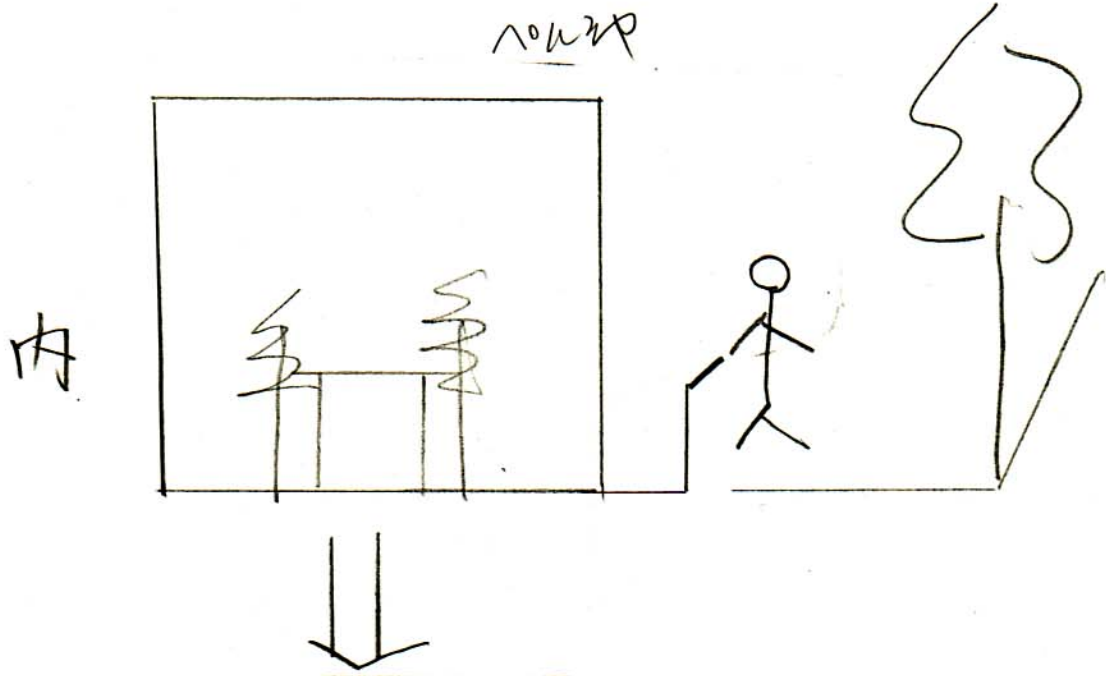
略図 4

(*略図参照4:草食獣舎)

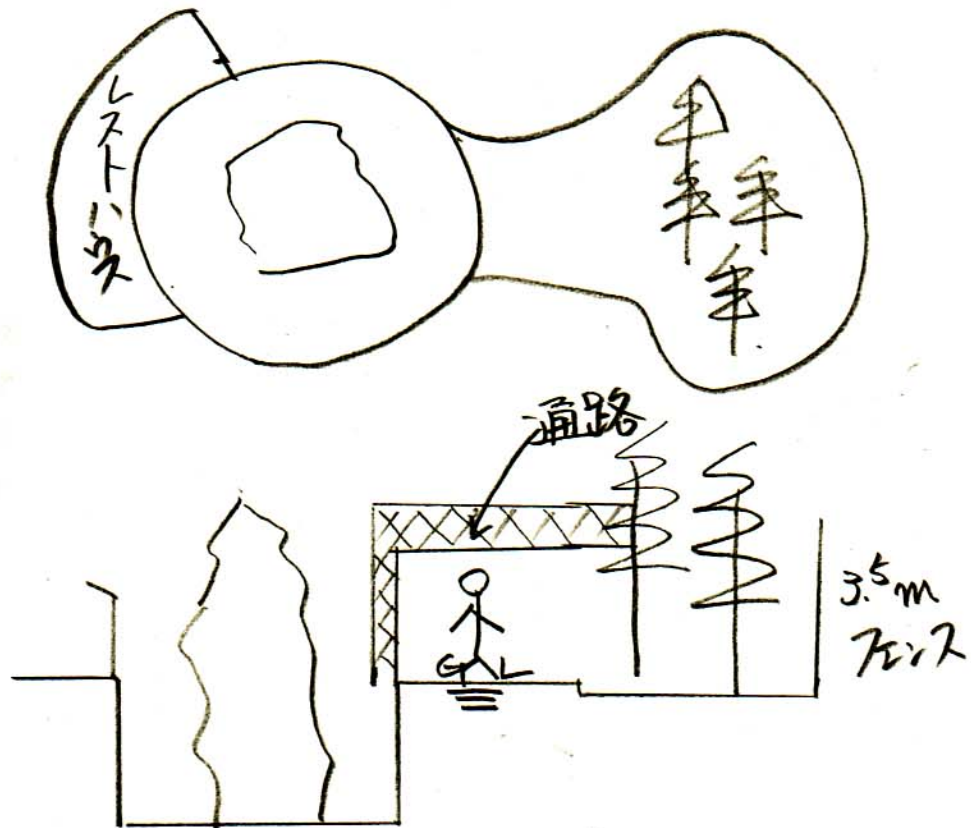


略図 5





(*略図参照6:サル山)



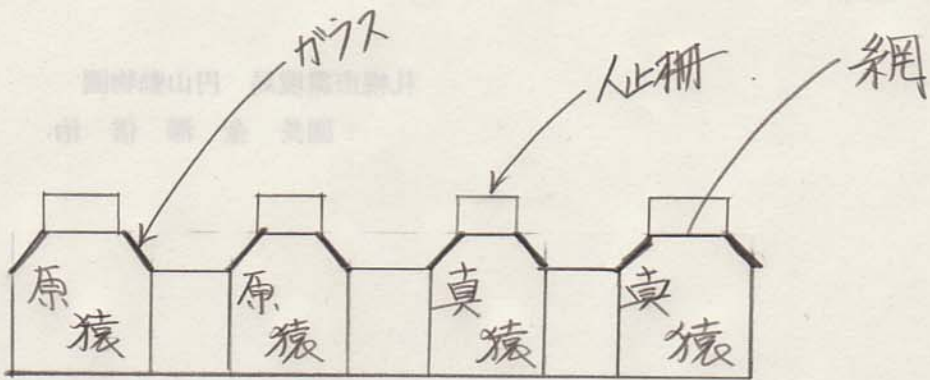
移動方法

空中通路

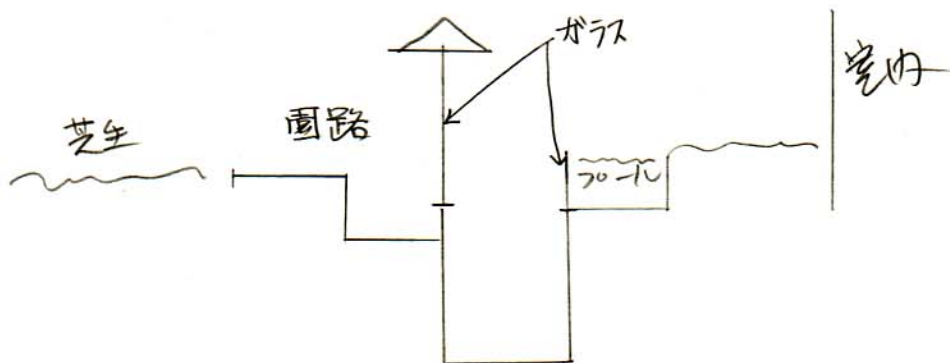
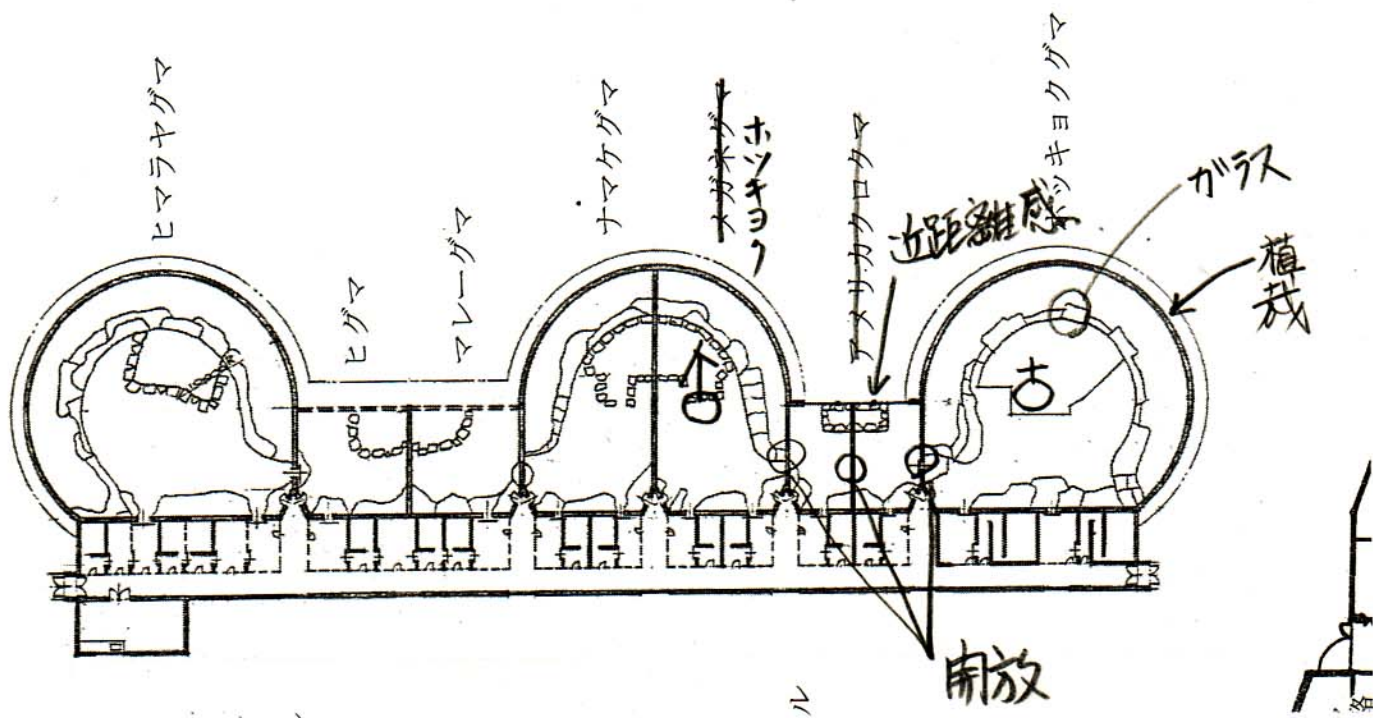
又は

地上

略図 7



略図 8



略図 9

